漆黒の王子、白銀の魔女

篠宮　かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
漆黒の王子、白銀の魔女

【Ｎコード】
Ｎ７７７０Ｗ

【作者名】
篠宮　かおる

【あらすじ】
漆黒の髪に血の様な紅き瞳。
そんな異端な容姿のダラスの若き将軍閣下に嫁いできたのは、月光を紡いだような白銀の髪に、紅玉の様な紅い瞳の持ち主の幼き皇女だった。
自分より表情がない皇女に戸惑う半面、皇女の中に密かに燻る感情を知った時、二人の歯車は回り始める。
魔法などは出てきません。悪しからず。

◆勅令（前書き）

続くかどうかは分かりません。
一人でも気に入って下さる方がいたら嬉しいです。

◆勅令

（これは何の嫌がらせだっ！！）

確かに自分はこの国の第二王子で、王族だ。
そして、次期国王にと望まれている異母兄に次ぎ、第二位の王位継承者でもある。（実際は第三位だが。）

これまでにも何度か不当な要求や、無理とも思える事を要求された事はあった。
それでもそれらの総てがこの国の利益に繋がったからこそ、何とか怒りを堪えてやってきたが、今回だけは絶対に引き受けられない。

――ダンッ、バン！！

重厚な、木で出来ている扉を乱暴に開け、病身の父である国王の代わりに、この国の政治の執務を執っている兄にズカズカと荒く歩み寄り、握りつぶした書類を突き付ける。

「何故俺があの国の皇女と結婚しなきゃならないんですか！！」

「相変わらず早とちりですね・・・。結婚ではなく婚約ですよ。ゼストラル将軍閣下。これも国の為です。」

表向きはね・・・？と薄く笑う異母兄は、本当に『白の貴公子』と言われ、日夜日頃、妙齢の令嬢達から慕われている人物と同一人物なんだろうか。

激しく納得がいかない。

それでも国の為とこの兄が言うのなら、自分は従おう。
異母兄はこの国の神であり、清らかで、潔癖でなければならない。
闇に埋もれ、数多の血に濡れ、恨まれるのは自分の役目ではなく運命。

「――御意。全ては仰せのままに。」

零歴１２０８年、まだ雪もちらつく初春。
後にダラス王国の史実にその名を残す事になるであろうゼストラル・デル・イル・ダラスは、自分の花嫁となる皇女の年齢を知らぬまま、婚約を受け入れた。

後に彼は愛しの妻と子供たちにせがまれ、当時の心境をこう語った。

――俺は、誰かに必要とされたかったのかも知れない。

と。

また、彼の残した日記にはこう記され、残っていた。

――どうせあの国の皇女の事だ。俺の容姿を見たら蔑むだろう。
所詮は国同士の契約でしかない。俺に『愛』等と言う甘い感情はない。

と。

◆勅令（後書き）

続き、読みたいですか？

◆奥入れ（前書き）

お気に入り登録して下さった方、読んで下さった方々様へ。
ありがとうございます。

◆輿入れ

――これは天から定められ、与えられた、逃げられない私の宿命。

輿に乗り、揺られること約一月。

故国・レガロニア帝国を出発したのは、花々が咲き乱れる春の終わり頃だった。

『姫様、到着しました。』

聞きなれた厳しい女官の声に、私の沈みかけていた意識は、無理やり浮上させられた。

太陽の光を遮るための紗幕を取り払われ、手をひかれ輿から降りてみれば、出迎えてくれたのは、柔和な笑みを浮かべた人と、にこりともしない黒髪の青年と、今回のこの縁組を帝国側に提案してきた、この国の宰相の三人だった。

「ようこそ、ここまでおいで下さいました。私がこの国の宰相を務めさせて頂いている、ニコラウスにございます。」

そう言って彼が頭を下げたのは、私ではなく、私の隣に立っていた女官だった。

その女官は、常々私より偉そうに振る舞い、いかに自分のほうが皇女らしいと言ってのけている人物だった。

そのせいか、私に間違われ、宰相の挨拶を受けた彼女は、柔和な

笑みを浮かべている青年に近づき、妖艶な笑みを顔に浮かべた。

『初めまして、お会い出来て光栄ですわ。噂とは全然異なりますのね』

彼女は自分が何をしているのかを理解していない。

シュルリ、と、衣擦れの音を立て、私は黒髪の青年の前に一歩進み出て、頭を下げた。

「お会いでき、嬉しく思います。これよりは、将軍閣下の意に従い、生涯をこの国に捧げたく思います。至らない処もあるかとは思いますが、何卒宜しくお願い申し上げます。」

私と彼の縁談が決まったのは、もう二年も前のこと。

でもそれは内々のことで、その事実が帝国中に提示された時は、周囲のあからさまな反応に傷ついた。

月光を紡いだと言われている髪は、三代前の反逆者である帝王陛下の伯父似で、紅玉のようだと譬えられる瞳は、禍々しいと言われていた。

極め付きは私の声だった。

父上の正妃である王妃様は、私の声を聞きたくもないと、喉を潰そうとした。

寸前で助けられたものの、助けてくれた者も、ほかの人々も私が声を出すから悪いのだと言った。

だから私は、極力声も出さず、今日まで過ごしてきた。

「・・・、お前は皇女の何だ？」

頭を上げ、発せられた言葉に、私はあやふやに微笑んだ。

その時の事を、当時の宰相は事細かく記録していた。

――いやはや失態であった。何年陛下の《当時は王太子殿下》側にいたのかと、我ながら情けなかった。殿下の御言葉に公妃様《当時はレガロニア帝国の皇女様》は、とても8歳とは思えない、悲しみの混じった、諦めにも似た笑みを浮かべておられた。

その笑みを見た殿下は、珍しく動揺していたと思われる。

事実、殿下は動揺していたらしい。

と。

答えを返さない私に苛立ったのか、黒髪の青年は踵を返した。

その時、如何にもそれを狙っていたかのように、笑顔を浮かべた青年が、声を発した。

『いらっしゃい。よく来てくれましたね。ルゼンシアーナ姫。不甲斐ない弟だけどよろしくね？』

流石は次期国王だと思った。

だからだろう。

本音がポロリと口から洩れていた。

『妾が皇女だと、よぅ判ったの。大抵の者はライラが妾だと思うぞ』

間違わなかったのはそなただけじゃ、と溢すと、頭を撫でられた。

『間違うわけないよ。だって僕が君のお父上にお願いしたんだからね。ーほら、ゼストラル、君の婚約者に挨拶しなきゃ。』

ゼストラルと呼ばれた黒髪の青年は、私の正体に驚いたのか、自分の兄上に噛みついていた。

曰く、

ー話が違う！！と。

その言葉に、チクリと胸が痛んだ事を、私はまだ知らない。

それに気付くのは、まだもう少し先の事。

◆輿入れ（後書き）

ハイ、二話目、更新しました。

◆洗礼

――祖国から離れれば、解り合える人がいるかもしれない。

そんな事を思い、僅かに希望を抱いてきた私はなんて愚かなのだろう。

目の前には毒入りのお茶に、一緒に食べれば身体が痺れる焼き菓子。

それをそうと知りながら、食べなければならない自分は、本当に望まれているのだろうか。

「どうなさいましたの？皇女様。さあ、召し上がって下さいな。」

「あら、ローズ、皇女様は幼いのだから、異国語が解るはずがないわよ。」

それもそうね、と、高慢に高笑いする令嬢達は、祖国を思い出させる。

私を人扱いせず、気持ち悪いと罵りながらも、時には鬱憤を晴らすための道具として、生かさず殺さずに玩具の様に扱う。

縁談が壊れたと言えば熱湯をかけられ、気に食わないと言うだけで叩かれ、蹴られ。

その名残である傷跡や火傷の跡は、生涯消える事はないだろうと宣告された。

（ありがたくない事じゃがな・・・。）

覚悟を決め、紅茶の入ったカップを両手でもち、口をつける。
途端、ピリッと舌に走る痛みと、徐々にカタカタと不自然に震えてくる両手。

どうやら、この国の毒は即効性らしい・・・。

私程度がこれなら、毒に抵抗性のない人間ならば、命にも関る。

私の身体の異変を感じ取ったのか、令嬢たちはネズミを追い詰めた猫のように、狡猾に微笑んでいる。

ここで倒れては、彼女たちの思うがまま。
それだけは避けなければならない。
レガロニアの権威を汚すという事は、母が殺されるという事。

無理やり婚約者と離され、凌辱された母が、失意のどん底で産み落としたこの命。

愛せない私を許してくれと泣いて詫びた母の為にも、ここで倒れる訳にはいかない。

なけなしの気力を掻き集め、カップを落さないようにテーブルに置き、優雅に見えるように立ち上がる。

『・・・，馳走になった。』

ライラを横目で見やれば、床に蹲り、もがき苦しんでいたが、助けてやる事は出来ない。

『帰るぞ。何をしておる』

ダラス側がよこした監視様の侍女達に声をかけ、この部屋を出る。
とにかく、誰もいない所へ行きたい。
一刻も早く、体内にある毒を吐きだしてしまいたい。

両国の和平を望む為、ダラス入りして、まだ三日。
この事実をレガロニアに流せば、戦争になるだろう。
あの戦好きの貴族たちの事。
私が情報を流さなくても、自分達で掴むだろう。

『すまぬが、一人にしてはくれなんだか？いや、見てはいては良いが、少しだけ妾から離れていて欲しい。』

闇雲に歩いてきたせいか、人気のない庭にいた。

ふらふらと噴水へ歩み寄り、石で出来た縁に座る。
ぐるぐると視界が回る。
吐きたいのに、人目がある故に吐き出せない。
いや、吐き出すことは出来ない。

暫くは毒の副作用で動けないだろう。
いくら母国で毒になれているとはいえ、しょせんは8歳でしかない己の身体。
苦しい、辛いと言えるほど、心はダラスに慣れてはいない。

涙の一つも流せれば、同情を買えただろうに、泣いた記憶はない。
笑うということも、どうするのか忘れてしまった。
怒るということも、喜ぶということも、どうしたら良いのだろう。

乱れ、歪んでいく視界の中、私が最後に見たのは、蒼い蒼い空だ

った。

◆

いつもの時間、いつもの様に見回りを終えた俺は、ふと、気紛れを起こした。
幼い頃は良く行った、今は亡き先代国王の癒しの庭。
普段は誰も近寄らない、寂れた庭。

ところが、その日は違った。

あの皇女に就けた侍女が、噴水で何かをしている様だった。
暫く様子を見ていると、信じがたい光景を見てしまった。

――何故、頭を押さえつけられている？

何故、皇女が・・・。

考えている暇はなかった。
このまま、あの幼い皇女が死んだとなれば、開戦は間違いないだろう。
兄と、父が必死に守ろうとする平和を壊すにわけにはいかない。
瞬時に侍女を失神させ、ずぶ濡れの皇女を助け出した。
気道を確保してやると、ケホ、ケホっと咳き込みながらも、皇女は水を吐き出した。
そして、薄い瞼を開き、確かに皇女は呟いた。

――何故、助けた

と。

それは、とても幼い子供が発するモノとは思えぬものだった。

◆洗礼（後書き）

暗くて、すみません。
でも、これがないと二人の関係が始まりませんので。
早く、明るいシーンが書きたいです。

◆女官ー1（前書き）

祝・２５件越え～？

◆女官ー1

幼く、小さな額に、珠の様に次々と浮かぶ汗に、苦悶に満ちた吐息。

熱に浮かされ、火照った身体は紅く染まっている。

「どうだ、皇女の様子は」

「大変、申し上げ難いのですが、ここ二・三日が峠でしょうな。」

噴水から救いあげ、直ちに医師に診させた結果がこれ。

自分がもう少し早くあの場に着いていたのなら、状況は変わっていたのかもしれない。

何故、誰も皇女を助けようとはしなかった。

どうして彼女は目を覚まさないのか。

自戒の念に囚われていた俺は、医師の言葉によって、更なる後悔を覚えた。

「風邪自体はすぐに良くなりましょう。ですが、皇女様がお飲みになられた毒が問題なのです。」

「毒だと・・・？どういうことだ。」

「恐れながら、ルゼンシアーナ様におかれましては、その幼い身体に反し、多数の毒薬を飲まれた痕跡が色濃く出ています。おそらく、母体にいる時から命を狙われていたのでしょう。」

８歳と言う年齢の割に、小さな身体がその証拠だと、医師は悲痛な声で語った。

皇女の部屋が、陰鬱な空気で満たされつつあった時、よろめきながら、少しばかり年嵩の女官が、皇女が伏している寝台に近付いてきた。

その女官は、皇女が苦しんでいるというのに、声をかけ、無理矢理起こそうとした。

『姫様、起きて下さい。姫様。』

「おい、ムリだ。皇女は、」

『貴方には関係ありません』

ピシャリ、と、厳しく撥ね退けられ、俺はそれ以上何も言えなかった。

この女官は、皇女が連れてきた唯一無二の腹心の女官であり、唯一、皇女を慈しんでいる様だった。

だから、こんなにも思いつめているのかと、このときは、単純にそう思っていた。

◆女官ー1（後書き）

超・短文ですが、更新です。

◆女官ー2（前書き）

登録ありがとうございます。

◆女官―2

―グエンシーナ、済まない。

寂れた王宮の北庭で、男が女に頭を下げて詫びる。

あぁ、この方は正直すぎる。

正直すぎるから嫌いになりきれない。

酷い方だと、最低な方だと思いながら、そうと知りながら、それでも私は、この方から離れられなかった。

何故なら、私があの御方の直系の子孫だと知りながら、受け入れて下さった初めての方だったから。

最初はただの情報源として、資金源の相手としてしか見ていなかった。

身体を重ねるのは、ほんの見返りに過ぎなかったけれど、日と回数を重ねる内に、自然と私の心の中に降り積もった想いと、授かった命。

それを知った時、こうなる前に離れておけばよかったと思ったのは、ほんの僅か。

次に芽生えたのは、我がユーリニア家の務めと誇り。

あの御方の無念と真実を伝えていく為、授かった命なのだと思おうとした。

幸いにも私の一族は、私の妊娠を喜んでくれた。
あの人の傍を離れ、これからは家の為に、この授かった子を必死で育てようと思った。

そして時が過ぎ、私がやがて命がけで産み落した子は、あの御方のご息女に生き写しだった。

白銀の美しい髪はあの御方と同じく、紅い瞳は、その御方のお妃様譲り。

完全なるユーリニア家の特徴に、両親は「良くやった」と、喜んで、褒めてくれた。

それからひと月もしない内に、私は再びあの人と出逢い、頭を下げられてしまった。

償いはするからと。
君を愛するからと。

――だから、その子は王妃様に。

その辛そうな表情と口調に、私は間抜けにも絆され、愛しい我が子を手放してしまった。

それと引き換えに、私は王宮に女官として上がるようになった。
それと同時に、私は引き換えた我が子の代わりに、一人の男の子を手に入れた。

その子は、あの人が後にも先にも、心の底から愛した女性が、陛

下によって無理矢理孕まされた末に産み落とした子だった。

でも、成長するに従って、その男の子は、あろうことか、あの人とそっくりに育ってきていた。

これに驚いた私は、迷うことなく、その子を抱き、雨が降る真夜中にも関らず、距離を置いていたあの人のもとへと急いだ。

あの人は、私の突然の来訪に驚いたのか、暫く怪訝そうにしていたが、私が胸に抱く子を認め、すぐに事情を察してくれ、翌日には、私はあの人の妻と言う立場になっていた。

そして、あの子は、あの人が愛した女性の名前――アゼリア妃――から取り、アゼルと名付けられた。

暫くはアゼルを見て、複雑そうにしていたけれど、あの人にも身に覚えがあるのか、それでもアゼルを可愛がり、私をも愛してくれた。

この幸せがずっと続けばいいと、私は願い、思っていた。

けれど、私のそんな願いは叶わず、事実と現実は何処までも残酷だった。

◇

喉が痛い、身体がだるい、頭が上手く働かない。

うっすらと瞼を持ち上げ、部屋の中を見回す。

どうやら、まだ生きていたらしい。

（妾も中々悪運が強いとみえるの。）

ふぅーっ。と、ゆっくり息を吐くと、ガバリと、誰かが勢いよく跳ね起きた。

『姫様ッ！！』

痛いくらいにそのまま抱きついてきたのは、キニス侯爵夫人でもある、私の信頼する女官のイルエラ。

『ようございました、姫様。このまま、もう二度と目を覚まさないかと・・・。』

『泣くでない・・・。そなたをおいて、妾は蓮の川は渡らぬゆえ、安心いたせ。』

家族と離れ、幼いわが子を置いてまで私に着いてきてくれた。母の代わりに一生懸命愛して、支えてくれる彼女、――イルエラ。

そんな彼女を安心させたくて、毒の影響か低く掠れてしまった声で言葉を掛ければ、イルエラは瞳を涙で潤ませ、声は今にも泣き出しそうな声になってしまった

（全く、どうにも敵わぬな。）

彼女に泣かれては、慰める事しかできない。

私がそんな事に思考を囚われかけた時、その感情の読めない声は、天から降ってきた。

「目が覚めたのか？」

その声に、私とイルエラは、ようやく自分たち以外の存在に気がついた。

その声の方へと目をやれば、黒く、長い髪を一つにまとめ、身軽そうな衣服に身を包んだこの国の将軍閣下がいた。

その彼の眼光は鋭く、その瞳の色は・・・。

「何があったか、話せるか？」

私は彼の言葉も耳に入れず、その瞳を見ていた。

彼の瞳は私と同じく、それでもより鮮やかな煉獄の炎の様な紅い瞳・・・。

その瞳は、己の使命を理解し、誇りを持っているかのように輝いている。

そのまま固まったように、一向に返事を返さない私に、ゆっくりと近づいてくる、靴音。

一歩、また一歩と、確実に、緩やかに。

そして。

さらりと、長く、忌まわしい罪の証でもある髪に触れられた私は、何かに封じ込められたかのように、全く動けなかった。

「さぁ、答えて貰おうか・・・。レガロニアの忌姫。」

この時、もし涙の一つでも流していたのなら、きっと運命は変わっていただろう。

でも、私は泣かずに、微かに微笑んだと、後に教えられた。

◆女官ー2（後書き）

全然、甘くないですが、よろしくお願いします。

◆甘くない逢瀬（前書き）

更新。

少数派の方々様へ。

お待たせしました。題名に偽りあり。

◆甘くない逢瀬

どうやら私は何処に行っても誰からも嫌われる定めらしい。

「妾が忌姫とな？黒の将軍」

面白いではないか、と、笑いながら、私はまだ素直に動かない身体を、イルエラに寝台の上で助け起こして貰い、自分の忌々しい髪を彼から取り戻した。

「忌姫とはよう言うたものじゃ。そちが妾にとっては忌々しいと言うに。」

鼻を鳴らし、ついっと、顔を逸らす。

彼が私の領土に攻め込まなければ、民は死なずに済んだ。

彼が私との婚姻を受け入れなければ、私は傷を負わされずに済んだ。

なのに、私が悪いと言うのか、この者は。

「何があったじゃと？そんな事は自分で調べるのじゃな、イルエラ、塩じゃ、塩を撒け。」

「姫様、塩では勿体のうございます。」

「そうか。では砂じゃ、砂でも撒き、とっとと追い出すのじゃ！！」

湧きあがったのは、強い孤独。

今は遠く離れた故郷でも一人だったが、遥々嫁ぎに来たこの異国の地でも、私は受け入れて貰えない。

（妾は生れてからずっと一人じゃ。誰も妾を見てはくれぬ。妾だけを求めてはくれぬ。）

今回の婚約も私の名を冠している領地が欲しかっただけ。
誰も言ってはいないが、恐らくそれで間違いはないだろう。

あの次期国王はそうでもなければ私を決して選びはしない。

そう思えば、ぷッくりと、涙が盛り上がって来る。

「・・・っ、」

「はよう、出てゆけ！！目障りじゃ。」

不意に伸ばされてきた大きな手を、パチンと大きな音を立て、弾き払う。

私を求めてくれない人には触れて欲しくはない。
心配もして欲しくはない。

望むのは、完全なる孤独。

求めるのならば、全てを求めて欲しい。
救ってくれるのならば、私の全てを受け入れて欲しい。

決して【忌姫】と言う言葉に惑わされるのではなく。

勢い良く具合の悪い身体を寝台に横たえ、布団を頭まで被り、丸くなる。

「お聞きになられたでしょう、姫様は目障りだと仰せです。」

お帰り下さい、と、淡々と命じるイルエラの声に、私は瞳を閉じた。

涙が零れるのは何年振りだろうか。

（まだ、妾にも残ってたのじゃな、人らしさが。）

そう苦笑し、私が思い、願う事は。

このまま泡となって消えてしまいたい。

泡でなくとも、このまま毒に犯されて死んでしまいたい。

と言う事。

でも、それは叶わないだろう。

だって私は、生きながらの生き人形なのだから。

私をこの呪いから救ってくれるのは、真実、私を必要としてくれる人のみ。

（妾は、何処に行けばよいのじゃ・・・。）

溢れる涙をそのまま、私は眠りに着いた。

◆甘くない逢瀬（後書き）

久々に更新してみました。

Ｓｉ～は、校正中です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7770w/

漆黒の王子、白銀の魔女

2011年12月11日17時25分発行